

される。昭和48年より昭和51年までの4年間に行なわれた術後照射51例につき報告する。全例に定型乳切後、telecobaltを照射している。病期Ⅰは、10例現在、全例生存、胸骨旁のみへの照射5例、鎖骨上窩を加えた2カ所への照射3例、腋窩リンパ節をも加えたもの2例。線量は42~45 Gyの病期Ⅱは26例。生存率は17例、65.4%。Noは13例あり76.9%生存。N<sub>1</sub>は53.8%生存。45 Gyの線量を、胸骨旁、鎖骨上窩及、腋窩に照射、化学療法をも併用したものは8例、生存率は37.5%放治単独は18例、生存率76.9%。病期Ⅲaは、13例、生存は、38.5%。照射部位は、病期Ⅱと同様線量は45 Gy。局所再発は、2例、15.4%。病期Ⅲbは2例、照射はⅢaと同様。いずれも2年以内に死亡し、局所再発も併発した。

## 12. 胃癌術前照射

上村志伸(国病医療センター・外科)

過去2回の本会において、腺癌である胃癌にも術前照射は有効であることを、切除率を中心に臨床的に報告し、また主に免疫学のおよび放射線障害の点から、照射法は比較的大量線量を使用する週2回法が最良であることを報告してきたが、組織学的に検討しほぼ同様の下記のごとき結論を得た。

①照射治療の直接効果を大里・下里分類を用いて、胃癌取扱い規約による tubl.~sig. までの組織型別にみると、週2回、3回および5回法の差はみられなかった。

②免疫学的反応を示す間葉系細胞のリンパ球、プラマス球、マクロファージの出現頻度では、週5回法はそれらの出現傾向が低く、週2回および3回法に高くみられた。

以上のことから、週2回法が直接的にも、間接的にもより高い治療効果が得られるものと考ええる。

## 13. 本教室における精上皮腫の治療成績

岡田淳一、宇野公一、三好武美、有水 昇  
(千大)

宮内大成、山口邦男、島崎 淳(千大・泌)

1961年から1981年まで、千葉大泌尿器科および放射線科において治療を行った睾丸腫瘍特に精上皮腫25例について調査し、検討を加えた。ステージ分類、予後、等のほか、ステージ1、2に対する放射線治療について、文献的考察を加え発表した。

## 14. 放射線治療により効果が得られた肝腫瘍

幡野和男、御厨修一、三上明彦  
(国病医療センター)

此枝絃一 (国療東京病院)

肝癌は最近、著しい増加を示し、それに対する有効な治療体系の確立が望まれている。そうした中で肝癌に対する放射線治療に関しては、あまり報告がなく又その効果に対して疑問視する傾向があるが、今回、原発性及び転移性肝癌への放射線治療で著明な効果を得た。第1例は、56歳、男性、原発性肝癌で門脈右枝腫瘍塞栓の為、手術不能であったが、放射線治療及び化学療法併用によって、手術可能となり、術後、現在生存中である。第2例は、67歳、男性、胃癌からの転移性肝癌で著明な肝腫大と疼痛により入院。放射線治療及び化学療法併用により痛み疼痛消失、著明な腫瘍縮小を認めた。このように肝癌に対しても放射線治療は有効と思われ、今後の研究に期待したい。

## 15. 原発性肝癌の外部照射の1例

縄野 繁(千大)

肝切除不能、塞栓術不成功であった原発性肝癌および娘結節に対し外部照射を施行した。照射は10 MV X線を用い、腫瘍に34.5 Gy 娘結節に30 Gy 照射した。同時に放射線増感剤として、低分子デキストラン、ウロキナーゼ、FT 207を用いた。照射前、照射終了時、および5カ月後にCT、エコー、アンギオ、肝スキャンを施行し経過を観察した。その結果、腫瘍は32×28 mmより照射終了時に30×20mm、5カ月後に28×20mmに縮小し、腫瘍中心部および娘結節は壊死におちいていた。また転移も認められておらず、原発性肝癌に対し照射の有効性が示唆された。照射中食思不振等の症状がみられたが、重大な副作用は認められなかった。しかし5カ月後のCTにて照射部位に一致してCT値の低下が見られ、照射による肝炎が最も強く疑われた。

## 16. 肝癌の発癌モデルの進歩について

高円博文(千大・1内)

実験化学発癌の研究の進歩は著しいもので、これまでの知識では化学発癌の過程には、特に皮膚化学発癌の研究成果より癌が出現するまでにすくなくとも2つのステップが存在することが明らかになった。すなわち、DNA等の遺伝物質に不可逆的な変化を起す過程である intiation、およびさらにこの過程により生じた集団が腫瘍としての性格を確固たるものとしながら成長して行く promotion という過程などがはっきりしてきた。これら一連の化学発癌の研究の進歩に伴い、実験肝癌の分野においても、数々の化学発癌モデルが作成されこれらのス